

陸前高田市文化財報告第10集

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅱ

1986年3月

陸前高田市教育委員会

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅱ

発刊にあたり

広田湾周辺は、有数の貝塚密集地帯で、多くの貝塚が所在することで知られている。それらについての保存及び管理は、宅地化などの開発行為が進むなかで、文化財保護行政の急務を要する今日的な課題である。

特にも中沢浜貝塚は、明治末期頃から人骨が出土する貝塚として県内外に知られた重要な史跡であるが、昭和9年に国指定史蹟となって以来、周辺の現状も大きく変化し、またその後の調査研究による貝塚の解明も行なわれてこなかった。

そのため「中沢浜貝塚保存管理計画」を策定する目的で、昭和59年度より5ヶ年計画で遺跡内容確認調査を行なってきた。

この報告書は、第2年次にあたる今年度に確認された貝層の拡がり及び遺構、保存状態などについての調査の成果をまとめたものである。本書が埋蔵文化財の保護に役立てば幸いである。

最後に、調査にあたっては岩手県教育委員会事務局主任文化主査 菊地郁雄、相原康二先生、作業に協力下さった多くの方々、また、獣骨、遺物等の鑑定をいただいた東北歴史資料館 岡村道雄先生をはじめ関係各位に対し心から感謝するとともに、今後のご指導ご協力をお願いしたい。

昭和61年3月30日

陸前高田市教育委員会

教育長 吉田正人

例 言

- 1、本書は、岩手県陸前高田市広田町字中沢浜に所在する中沢浜貝塚の発掘調査概報である。
- 2、調査は、保存管理計画を策定するための範囲確認調査の、第2次作業として行なった。
予算的には国庫補助による。
- 3、調査及び整理にあたっては次の方々のご指導を賜わった。(敬称略・順不同)
菊地郁雄、相原康二(以上岩手県教育委員会文化課)
遠藤勝博(県立広田水産高等学校) 金野良一(人船渡市立博物館)
高橋信雄、小田野哲憲、熊谷常正(以上岩手県立博物館) 岡村道雄(東北歴史資料館)
- 4、調査組織 団長 吉田正人(陸前高田市教育委員会教育長)
総括 菅原昭雄(同 社会教育課課長) 事務局 佐々木徹朗(同 社会教育課課長補佐)
調査員 佐藤正彦、蒲生琢磨、吉田功(同 社会教育課職員)
整理事業員 金君子、岩崎幸枝
- 5、文末に氏名を記した以外は、佐藤・蒲生・吉田が執筆し、編集は佐藤が行なった。

目 次

<p>序</p> <p>例言 目次</p> <p>I 調査に至る経緯…………… 1</p> <p>II 調査の方法…………… 1</p> <p style="text-align: center;">挿 図</p> <p>第1図 大設定図…………… 3</p> <p>第2図 グリッド設定図…………… 4</p> <p>第3図 Bc 48区具層及びセクション…………… 6</p> <p>第4図 Bh 42区具層及びセクション…………… 7</p> <p>第5図 焼土の拡がり及び配石…………… 8</p> <p>第6図 Bf 45区具層及びセクション…………… 9</p> <p>第7図 Bi 57区遺構…………… 10</p> <p style="text-align: center;">写 真</p> <p>写真1 B 40地区 (Bc 48区)…………… 23</p> <p>写真2 B 40地区 (Be 42区、Bm 2区、Bm 4区、Bh 46区)…………… 24</p> <p>写真3 B 40地区 (Bh 42、Bf 45区)…………… 25</p> <p>写真4 B 40地区 (Bf 45区)…………… 26</p>	<p>III 本文…………… 5</p> <p>1、B 40地区…(5) 3、B 50・C 50地区…(11)</p> <p>2、C 40地区…(11) 4、D 50・D 60地区…(16)</p> <p>IV まとめ…………… 17</p> <p style="text-align: center;">目 次</p> <p>第8図 Ce 51区遺構…………… 15</p> <p>第9図 発掘区断面の柱状図…………… 16</p> <p>第10図 出土遺物…………… 18</p> <p>第11図 出土遺物…………… 19</p> <p>第12図 出土遺物…………… 20</p> <p>第13図 出土遺物…………… 21</p> <p>第14図 出土遺物…………… 22</p> <p style="text-align: center;">写 真</p> <p>写真5 C 40地区 (Cm 0区、Cm 1区、Ca 2区、Cf 43区)…………… 27</p> <p>写真6 B 50地区 (Bi 56、Bi 57区)…………… 28</p> <p>写真7 C 50地区 (Ce 50、Ce 51区)…………… 29</p> <p>写真8 D 60地区 (Cd 64、Dc 65区)…………… 30</p>
---	---

I、調査に至る経緯

発掘調査は、国指定史跡中沢浜貝塚の保存管理計画を策定する資料を得るため、貝層などの範囲と内容の確認を目的とするものである。この中沢浜貝塚保存管理計画の策定については、昭和58年に文化庁文化財保護部そして岩手県教育委員会文化課より管理計画を策定するための指導があり、これを受けて昭和59年度より策定に伴う事前の調査に踏切った。

計画の骨子は、昭和59年度から同63年度までの5ケ年間、国・県の補助を受けて継続事業で調査を行い、この調査を基本にして昭和64・65年度の2ケ年間で保存管理のための具体的施策を策定するものである。

昭和59年度（初年度）の発掘調査は、過去における発掘調査によって貝層の検出された地域に重点を置き、中沢浜貝塚の南側に位置する所有者臼井包治氏の宅地約130㎡と、北東側に位置する吉田三人氏の宅地約15㎡の2ヶ所を行なった。調査の結果、縄文前期末、中期末及び晩期中葉の貝層を検出したが、これについては昭和60年3月に発刊した「中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ」に報告しているとおりである。

昭和60年度（2年次）の調査は丘陵の北東側を主体とし、昨年のA調査区、吉田三人氏宅附近で検出した貝層の広がりを確認することに重点がおかれ、藤井昭一郎氏、吉田三人氏、藤井実氏、村上順一氏、吉田二八氏、吉田タツヨ氏の所有する宅地及び畑地にグリットを18ヶ所設定して調査を行なった。調査費は国・県の補助を受け、150万円の予算が措置された。

調査の実施にあたっては、中沢浜地域住民並びに地権者の理解と協力を得るために、現地において2回にわたって事前の説明会を開催し、範囲確認調査の目的、内容及び今後の調査予定等の説明を行った。

発掘調査は、説明会等により地権者の承諾を得て、昭和60年6月24日から開始し、同年10月22日までの約4ヶ月間で調査を終了している。

なお、61年度以降の計画では、61年度に丘陵の南側斜面大設定区D10、D20、D30、D40、E10、E20、E30、E40、62年、63年に丘陵の鞍部及び北側斜面大設定区B10、B20、B30、C10、C20、C30を調査する予定である。（第1図参照のこと）

佐々木徹朗

II、調査の方法

今年度調査は、貝層の分布状況、保存状態、形成時期などの把握及び確認を主に行い、また、調査区の一部において、ピットなどの遺構を確認している。

対象区域は、貝塚の中心部位置から東側にかけての丘陵部で、付近一帯の宅地化した現状から現地踏査を行い、限定された場所に発掘区を選定して行った。現地踏査においては、微地形、貝殻などの遺物の散布状態の観察、また過去の調査資料から区域内の分布範囲を推定し、特に、昨年度の擁壁工事に伴う事前調査によって、保存良好な貝層の所在が確認された北東よりの丘陵基部付近に重点を置いた。

発掘時点における発掘区の表示は、記録する便宜上から仮の呼称を用い、整理の段階で調査予定地の大設定図を作成し、各発掘地点を落とすようにした。まず、調査予定地の地形と方位を考慮し、貝塚北側の境を示す史跡杭を交点とするほぼ東西、南北のラインを設けて碁盤目状に区切る。東西ラインは、北からA～Gのローマ字、南北ラインは、西から0～80の2桁数字を用いて示し、30平方メートルの区画を大区画とした。更に、大区画は3mごとに10区に区切り、東西の各ラインをa～jのローマ字、南北ラインを0～9の数字で示す区画を設けた。3平方メートルの区画は、ローマ字を上、数字を下に例えば、Ca55区として表示した。

発掘地点は、B40区においては6ヶ所、C40区は4ヶ所、B50、C50、D50、D60区の各区においては2ヶ所の合計18ヶ所で、第1図に示したとおりである。

また、各発掘区は、堆積状況、層位及び旧地形などを統一して把握する必要から、ほぼ磁北方位に3mグリッドの区画を設定し、適宜に1×2m幅で掘り下げ、堆積層の掘り応じて随時拡張するなどの方法を取り、20分の1平面分布図及びセクション図を作成した後、埋め戻しを行った。

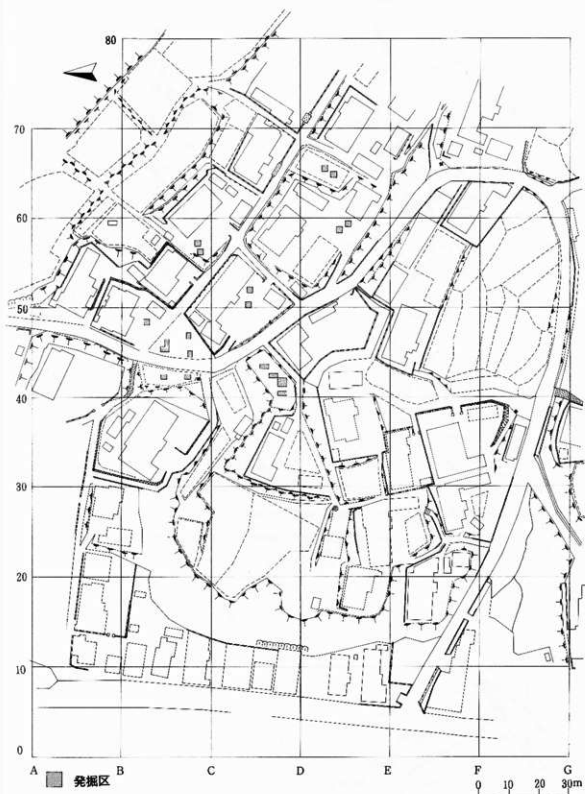
遺構の検出にあたっては、平面の観察結果という限界性があり、発掘区によっては、層中の遺物の含有状態及び堆積層の落ち込み等の観察から、調査を中止した場合もある。

また、出土遺物に関しては、堆積層ごとに月日、グリッド名、遺物番号を明記したポリ袋に入れるなど保護、区別し、特に、貝層等の検出面に共存する遺物については、形成時期などの検討資料として取り上げた。

以下、各区の調査状況を①B40地区、②C40地区、③B50、C50地区、④D50、D60地区の4つに区分して説明すると次のとおりである。

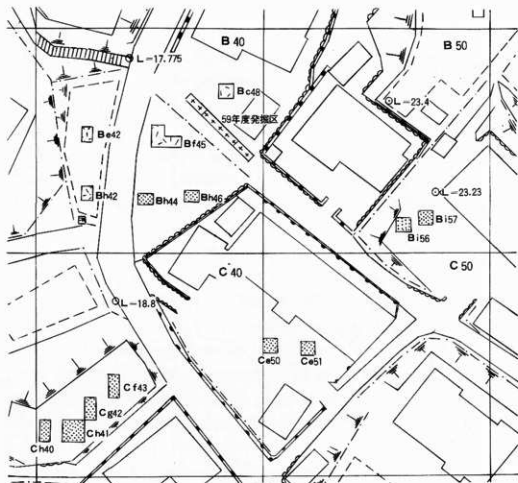
なお、各発掘区の堆積状況は、各区の西壁観察により得たものを主に模式的に柱状図等で表わし、土層の注記にあたっては、「新版標準土色帖」に従っている。

蒲生琢磨

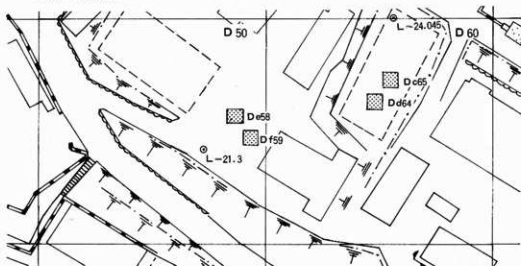


第1図 大設定図

B40・B50・C40・C50地区



D50・D60地区



- 60年度発掘区
 60年度貝層検出区
 59年度発掘区

第2図 グリッド設定図

Ⅱ、本 文

1. B40地区 (写真1~4)

まず、貝層の拡がりを知るため、昨年度調査地点の近い所に3mグリッドを設定し、Be48区と名付けた。地目は宅地である。更に付近の貝殻の散布状態から、現在市道によって分断されている畑地にそれぞれ連続したグリッドを設け、任意の間隔をわいた区画を発掘対象として1×2m幅で掘り下げた。西側の区画は、北からBe42、Bh42区、東側は西からBh44、Bh46区とした。

畑地東側の発掘区においては、いずれも耕作による攪乱を受け、この時点では貝層の形成は見られず、遺物もほとんど出土しなかった。堆積層は、地表下25~45cmで地山に達し、現地地形に沿ってなだらかに傾斜している。

また、Be48、Bh42区では、宅地造成及び耕作によって著しく攪乱を受けているものの、アサリ、レイシガイ、タマキビなどの岩礁性の巻貝を含む純貝層を全面にわたって検出し、石鏡などの遺物も共伴して出土した。貝層上面からは、時期を知るための資料は得られなかった。

Be42区においては、グリッド中央付近の6層の黒褐色土層中より、焼土の拡がり、配石などの遺構を確認し、調査を中止した。5層は、縄文時代後期の遺物を伴うが調査時点では、遺構の存在は判然としなない。また、Bh42区検出区から予想された貝層の拡がり、検土区によるボーリング調査によって、遺構検出面下約45cmの位置で確認され、この区にかけてなだらかに傾斜し、北方向に拡がると推定される。更に、これらの調査結果から、貝層の始まりが推定されるBe48区とBh42区のほぼ中間地点の畑地に発掘区を設け、Bf45区とした。

耕作土削除後、南壁寄りから拡がる貝層、灰層を同一面で検出した。一部ウネ状に攪乱を受けているが、堆積層は西方向に緩やかに傾斜する。更に、これらの各層に重なる魚骨層を検出した。魚骨層は、発掘区のほぼ中央部より北壁に向かって急傾斜して堆積し、マダイ、マグロなどを主体とする。この層は、伴出資料から、縄文時代前期末に形成されたと推定される。昨年度調査においては、同時期の資料と中期末の貝層が得られているが、更に時間的な堆積状況を知るため同区北側の一部を拡幅した。拡幅部では、ほぼ同一レベルで灰層及び貝層上面を検出した。貝層は、北壁付近で検出し、かなり緩やかに西方向に拡がる。また、灰層は、拡幅部南側から中央部にかけて拡がり、マグロの椎骨などとともに廃棄されている。これらの堆積層は、縄文時代前期末より新しい時期に形成されたものであるが、時期を知るための資料は得られなかった。

なお、この地区の畑地は、大正13年に柴田内務省考査官らによって調査が行なわれている。今回の調査では、当時の発掘地点の確認と併せて行われたが、判明していない。

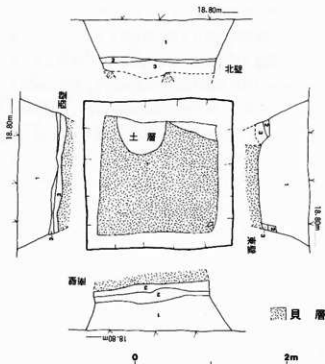
(1) Bc48区 (写真1-1)

① 貝層及び層序 (第3図、写真1-2)

層序は、1層がオリーブ褐色土、2層黒色土、3層黒色土、4層貝層である。1～3層は攪乱層であるが、2層・3層は焼土粒・破砕貝を含み、2層に比べると3層には破砕貝が多く含まれる。4層は、イガイ・ムラサキインコ等の破砕貝を多く含む貝層である。貝層の一部は攪乱を受ける。時期は不明である。

② 出土遺物 (第13図60・63・72・73)

少量の土器片が出土した。ほとんど攪乱層中からの出土で、大木9式の遺物を含む。貝層の時期を知り得る資料は出土しなかった。石器は、石鏃2点 (60・63)、石鏃未製品2点 (72・73) が出土した。60・72・73は貝層上面よりの出土である。60・63は、鏃身が二等辺三角形に近い形を呈し、基部には袂りを有する。



第3図 Bc48区 貝層及びセクション

第1層 宅地造成の際の盛り土及びゴミの層。

第2層 10Y R 黒褐色土層。破砕貝、炭化物を少量、焼土粒を微量含む。

第3層 10Y R 黒褐色土層。破砕貝を中量、炭化物、焼土粒を少量含む。

(2) Bh46・Bh44区

① 層序 (第9図①)

第1層 耕作土 第2層 10Y R 暗褐色土層。炭化物、砂を少量含む。

第3層 10Y R 黒褐色土層。10Y R 黄褐色土をブロック状に含む。土器片を少量含む。 第4層 10Y R 黄褐色土層。地山。

② 出土遺物 (第10図14)

土器片数点が出土した。14は口縁部資料である。口縁は波状を呈し外反する。2本の沈線により文様が意匠され、文様内には磨消縄文が施される。

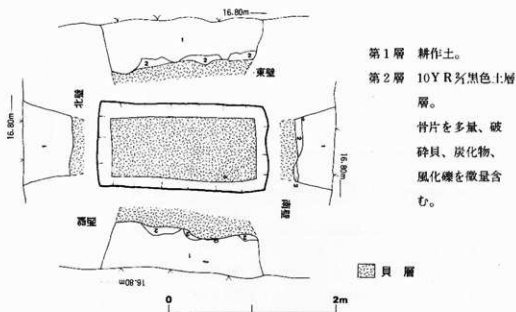
(3) Bh42区 (写真2-2)

① 貝層及び層序 (第4図、写真3-1)

層序は、1層が耕作土・攪乱層、2層黒色土、3層貝層である。貝層は、破砕貝を多く含む。貝層の一部は攪乱を受けている。時期は不明である。

② 遺物 (第14図87・88・89)

少量の土器片と骨角器3点が出土した。貝層の時期を知り得る資料は出土しなかった。骨角器は、未製品1点(89)、骨針2点(87・88)である。89は第1層出土。鹿角片の一部に整形が施されるのみであり、種別の判定はできない。87・88は、ともに貝層上面出土。鹿角製。88は先端部に使用痕が認められる。87は先端近位部を欠く。穿孔直下の点列は両面に施される。



第4図 Bh42区 貝層及びセクション

(4) Be42区 (写真2-2)

① 層序 (第9図②)

第1層 耕作土。

第2層 10Y R 7/2 暗褐色砂層。破砕貝、風化礫を少量含む。

第3層 10Y R 7/2 褐色砂層。

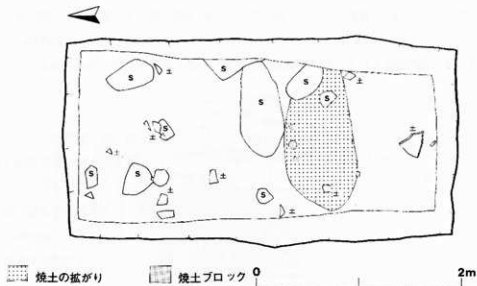
第4層 10Y R 多黒褐色土層。砂を多量、土器片、炭化物、小礫を少量含む。粘性有り。

第5層 10Y R 多黒褐色土層。土器片、砂、風化礫を多量、焼土粒、炭化物を微量含む。

第6層 10Y R 多黒褐色土層。焼土粒、砂を多量に含む。弱い粘性有り。

② 遺構 (第5図)

6層上面において、焼土粒の拡がり・焼土ブロック・配石を検出し、実測後埋め戻した。焼土粒の拡がりは楕円形を呈し、東側未調査区へと拡がる。拡がりには炭化物が多く混入し、北側部分で径2~4cm程の焼土ブロックを検出した。焼土粒の拡がり周辺には花崗岩の大型礫の配石が見られたが規則性はなく、ほとんどの礫は風化が著しく、ぼろぼろと崩れるような状況であった。配石と焼土粒の拡がりとの関係は不明である。時期は不明である。



第5図 Be42区 焼土の拡がり及び配石

③ 遺物

※土器・土製品 (第10図6・8・10・12・17、第11図28・29・32、第12図54)

中量の土器片と土製円盤1点が出土した。土器は5層、6層より多く出土し、主体をなすのは縄文時代後期の土器であるが、4層より内黒土師器杯の底部資料1点、5層より体部資料1点を得た。ともに口クロ使用で、底部資料には回転糸切り痕が見られた。6は大木10式に相当する。頸部無文部から垂下する沈線が曲線的な文様を意匠し、文様の岐点にはボタン状の貼付が見られる。8は後期初頭の遺物である。口縁は波状をなし、波状部から刺突の施された極く短い隆帯が垂下する。隆帯側縁には沈線が施されている。10・12・17は東北北半の十腰内I式に相当する資料である。横に展開する平行沈線により入組文・曲線文を意匠する。10・12には磨滑縄文手法が見られる。28・29・32は粗製・半粗製の遺物である。28は複合口縁をなす。

54は土製円盤である。土器片の再利用である。

※石器 (第13図66~68・71・77・79・81)

石鏃 3点(66~68)・石鏃未製品(71)・円盤状石器1点(81)・不定形石器(77・79)が出土した。石鏃は、鏃身が二等辺三角形に近い形を呈し基部に抉りを有する。側縁は外側に弧を描く。81は両面に剝離を施し円形に整形している。不定形石器は、77が両面加工、79が片面加工で、77はノッチを有する。

※ 骨角器 (第14図85)

釣針1点が出土した。第1層出土。鹿角製。軸部から湾曲部にかけての一部のみであるため全体の形状は明らかでない。

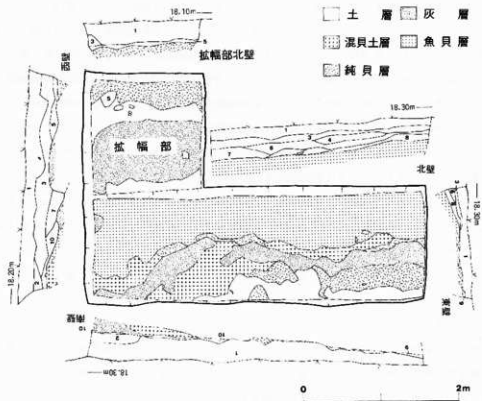
(5) Bf45区 (写真3-2)

① 層 序

第1層 耕作土。

第2層 10Y R ㉔黒褐色土層。魚骨小片、小礫、風化礫を微量含む。

第3層 10Y R ㉔黒褐色土層。砂、風化礫を少量含む。若干の粘性有り。



第6図 Bf45区 貝層及びセクション

- 第4層 10Y R 3/6暗褐色土層。風化礫を中量、土器片、炭化物を少量、魚骨片を微量含む。若干の粘性有り。
- 第5層 10Y R 3/6黒褐色土層。炭化物を少量、巻貝、破砕貝を微量含む。
- 第6層 10Y R 3/6暗褐色土層。10Y R 3/6黒褐色土をブロック状に含む。炭化物、砂を少量含む。若干の粘性有り。
- 第7層 10Y R 3/6暗褐色土層。炭化物を多量、破砕貝を中量、土器片、焼土粒、風化礫を少量含む。若干の粘性有り。
- 第8層 10Y R 3/6暗褐色土層。破砕貝を中量、骨片、小礫を少量含む。
- 第9層 10Y R 3/6暗褐色土層。破砕貝を中量含む。
- 第10層 10Y R 3/6暗褐色土層。土器片、風化礫を少量、焼土粒、炭化物を微量、魚骨片をブロック状に含む。破砕貝は含まれない。若干の粘性有り。

② 貝 層 (第6図、写真4-1、2)

Bf45区において、一部耕作により攪乱をうけるものの、保存良好な貝層を検出した。貝層は大別すると、Bf45区で1枚、拡幅部で1枚検出している。Bf45区検出のものは、表面的観察で魚骨層・純貝層・混貝土層・灰層に分けられる。層は北方向に傾斜しながら堆積する。時期的には、縄文時代前期末の層で、大木6式の遺物が出土している。拡幅部における貝層は、表面的観察では純貝層・魚骨層等の区分はできなかった。時期も不明である。

さて、昭和59年度に隣接する場所を調査したが、その際には大木6式の遺物を伴う貝層と、大木10式の遺物を伴う貝層を検出している。前期末の貝層については、層の堆積状態及びマグロ・マダイの骨を主体とする魚骨層が見られる等、多くの類似点がみられ、Bf45区が層の始まりと思われる。拡幅部検出の貝層と、大木10式の遺物を伴う貝層の関係は不明である。

③ 遺 物 (第10図1・2・3、第13図62・76、第14図86・90)

土器は、中量の土器片が出土した。1・2・3は大木6式に相当する。下層の貝層・魚骨層上面において検出した資料で、山形沈線・波状沈線により文様を意匠する。1・3は口縁部資料で、口縁は粘土の貼付により肥厚し、体部文様部と区画している。

石器は、石鎌1点(62)・石錐1点(76)・不定形石器1点が出土した。石鎌は、鎌身が二等辺三角形に近い形を呈し、基部には袈りを有する。側縁は外側に弧を描く。石錐は、つまみを有する。錐部は欠損し全体の形状は不明である。

竹角器は、釣針1点(86)、装身具1点(90)が出土した。釣針は、魚骨層上面出土。鹿角製。無鎌の完形で、軸頂部に袈りが施される。装身具は、拡幅部灰層上面出土。クマ(?)白歯製。素材の切断、穿孔及び歯根の整形が施されている。

2. C40地区 (写真5-1、2)

該区は、貝塚のほぼ中心に位置する。発掘区は、該区の南側、丘陵縁辺部のやや小高い地形を残す平坦部に3mグリッドを4区設け、各区画は、西からそれぞれCh40、Ch41、Cg42、Cf43区とした。

Cg42、Cf43区は、地表下10~30cmで風化した基盤岩に達した。堆積層のほとんどは擾乱を受け、層中より土器片などの遺物を若干採集したのみで、遺構は検出されていない。

また、この基盤岩は、Ch41区においても露出し、堆積層は、この基盤岩上に形成されている。堆積層の表土下は、黄褐色砂層と黒色砂層からなり、黄褐色砂層は、北壁付近から南側にかけて厚さを増し、ラミナ状に堆積する。Ch40区においても、黄褐色砂層の広がりが見られたが、下限は確認されていない。また、下層の黒色砂層は、基盤岩上に薄く堆積し、層中より縄文時代晩期の遺物が出土する。

① 層序 (第9図③)

第1層 10YR 5/2 暗褐色砂層。10YR 5/2 褐色土をブロック状に含む。微粒貝を微量含む。

第2層 10YR 5/2 黄褐色砂層。巻貝片を微量含む。ラミナ状に堆積する。

第3層 10YR 5/2 黒色砂層。大型礫を多量、土器片を少量含む。破砕貝を微量、砂を多量に含む。10YR 5/2 黒褐色土が混じる。

② 遺物 (第10図4・7、第11図24・27・30・33、第12図47・51)

極く少量の土器片及び土製円盤1点が出土した。4は大木6式の土器である。口縁は波状を呈し、波状部に2個の山形突起を有し、突起の基部には指頭押圧文が施される。口縁部は無文で、頸部には沈線と山形沈線文が巡る。沈線は連結部において渦巻き状に下垂し、その下には2個の貼瘤を有する。7は大木10式の体部資料である。隆沈線により曲線が施文される。24・47は晩期資料である。小破片なので全体のモチーフは不明である。27は変形工字文により口縁部から頸部にかけて施文する資料で、器種は浅鉢である。大洞C₂式の資料である。30・33は粗製の土器の口縁部資料である。口縁は、30では小波状口縁をなし、33は刻み目が入る。頸部は無文で3体部地文部と区画する。51は土製円盤である。土器片の再利用で、ほぼ楕円形を呈する。

3. B50・C50地区 (写真6、7)

該区は、貝塚中央部位置より東側、西南向き緩斜面にあたり、該地の自然地形は宅地造成による盛土及び削平によって、段々状に整地され損われている。発掘区は、宅地内の障害物等を考慮し、B50地区の南側及びC50地区の西側に3mグリッドを2区設け、西からそれぞれBi56、Bi57、Ce50、Ce51区とした。

B i 56区は、盛土削除後、4層に区分できる砂層の堆積を示し、各層は、西方向に比較的緩く傾斜する。砂層下は、黒色土層が堆積し、遺構などの存在が予想されるが、盛土の崩壊などの危険があり、調査を中止した。また、ハンドオーガーによるボーリング調査によって、調査面から約48cmで地山に達する。

B i 57区でも同様の堆積を示す。2層～5層の砂層下は、黒色土層が堆積し分層可能である。黒色土層は、後期、晩期など各時期の遺物を包含し、下層に至って、グリッド北壁及び南壁付近でピット2基を検出した。地山には、検出面下20cm程で達する。

C e 50区の堆積層は、第9図⑥の模式図で示すように1層から8層に区分される。表土下の各層は、南方向に緩やかに傾斜し、3層下は多様な遺物が混在するが、形成時期は明確化していない。地山は、地表面から約2m10cmを測る。

C e 51区は、2層掘り下げ時点でグリッド中央部に黒色土の落ち込みが見られ、調査を中止した。

(1) B i 56区 (写真6-1)

① 層序 (第9図④)

第1層 宅地造成の際の盛り土。

第2層 10Y R 3/4暗褐色砂層。土器片、炭化物を少量、砂砕貝を微量含む。

第3層 10Y R 5/6にふい黄褐色砂層。微粒貝を多量に含む。

第4層 10Y R 3/4灰黄褐色砂層。破砕貝、土器片、小礫を少量含む。

第5層 10Y R 3/4黒褐色砂層。土器片、炭化物を少量含む。

第6層 10Y R 3/4黒色土層。土器片を多量、炭化物を中量含む。粘性有り。層厚は、不明。

② 遺物 (第10図9、第11図20・21・25、第12図35・36・38・39・55、第13図59)

中量の土器片、土製円盤1点・石鏡1点が出土した。土器のほとんどは第1層盛土及び第2層旧表土よりの出土で、図示した資料はすべて攪乱層よりの出土である。土器の主体をなすのは縄文時代の資料であったが、4層からは土師器杯の体部資料が1点出土している。35は口縁部資料で、口縁は頸部で一度縮まり外反する。口縁部に刻みの入ったリボン状の貼付文を有する。36は口縁部が無文で、頸部には2条の沈線と1条の山形沈線が巡る。大木6式に相当する。38・39は、貼付文により楕円形及び渦巻き文を意匠する。大木8b式に相当する。9は波状口縁をなし、波状部から貼付文が体部に垂下する。貼付文には刺突が施される。縄文時代後期前葉の資料である。20・21は平行沈線により直線・曲線を意匠し、貼瘤を有する。25は大洞C₂式の遺物である。口唇に刻み目が施され、頸部に2条の沈線が巡り、体部には縄文が施文されている。頸部で「く」の字状に内側に折れ曲り、口唇部が若干外反する。石鏡は有茎で、側縁は外側に弧を描く。剝離調整は比較的雑である。

(2) B i 57区 (写真6-1)

① 層序 (第9図⑤)

第1層 宅地造成の際の盛り土。

第2層 10Y R 7/8 暗褐色砂層。破砕貝、小礫を中量含む。

第3層 10Y R 7/8 におい黄褐色砂層。巻貝等の破砕貝を多量、小礫を中量含む。

第4層 10Y R 7/8 黒褐色砂層。土、小礫を少量含む。

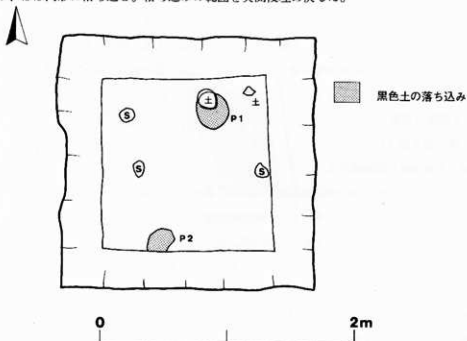
第5層 10Y R 7/8 黒褐色砂層。小礫を多量、土器片、炭化物、風化礫を少量含む。

第6層 10Y R 7/8 黒褐色土層。土器片、小礫を多量、炭化物、風化礫を中量含む。若干の粘性有り。

第7層 10Y R 7/8 黒色土層。炭化物、風化礫、中型礫を多量、土器片を少量含む。若干の粘性有り。

② 遺構 (第7図、写真6-2)

グリッド北壁及び南壁付近において、ピットを検出した。7層黒色土中に、若干暗い色の土が、ほぼ円形に落ち込む。落ち込みの範囲を実測後埋め戻した。



第7図 B i 57区 遺構

③ 遺物

※土器・土製品 (第10図11・13・15・16・18、第11図19・22・23・26・31・34、第12図43・52・53・56)

中量の土器片と土製円盤3点が出土した。土器は、縄文時代後期の資料が主体をなし、若干の中期・晩期、土師器資料が出土した。土師器は7層よりの出土で、内黒環の底部破片が1点出土している。底部には回転糸切り痕を残す。11・13・15・16・43は、数条の平行沈線を直線的・曲線的に展開して文様を意匠する土器で、十腰内Ⅰ式に相当する。11では曲線の分岐点に刺突が施されている。18・19は同一個体と思われる資料である。幅の狭い平行沈線と点列を直線的・曲線的に展開して文様を意匠している土器で、18は橋状の把手を有する。22・23は縄文時代後期後葉の遺物で、貼瘤を有する。ともに口縁部資料で、口縁は大波状を呈する。26は浅鉢である。口縁は内反し、口唇部で「く」の字状に折れ曲る。口唇部には地文が施文され、頸部には3条の沈線が巡る。大洞A式の遺物である。31・34は粗製の深鉢の口縁部資料である。頸部は無文で体部地文部と区画する。31は口唇部に2条の縄文が押圧されている。52・53・56は土製円盤である。土器片の再利用である。

※石器・石製品（第13図57・58・61・64・65・70・75・78・80）

石鏃6点・石錐1点・不定形石器1点・玉1点が出土した。57・58は有茎の石鏃である。側縁は57は外側に弧を描き、58は内側に弧を描く。剝離調整は、57は丁寧であるが58は比較的雑である。61・64・65・70は基部に抉りを有し、鏃身が二等辺三角形に近い形を呈する石鏃である。70は縦長の二等辺三角形を呈し、剝離調整は非常に丁寧である。75は石錐である。錐部は短かく、つまみを有する。剝離調整は雑である。78は不定形石器である。加工は両面に施してある。80は玉である。白玉状をなす。

(3) C・50区（写真7-1）

① 層序（第9図⑥）

第1層 宅地造成の際の盛り土。

第2層 10Y R 5/6～5/7にふい黄褐色砂層。破砕貝、微粒貝を少量含む。

第3層 10Y R 5/6褐色及び10Y R 5/7にふい黄褐色砂層。炭化物を少量、土器片を微量含む。

第4層 10Y R 5/6暗褐色砂層。土器片、破砕貝、炭化物、小礫を少量含む。

第5層 10Y R 5/6黒色土及び10Y R 5/6暗褐色砂層。黒色土層は、砂を多量に含む。土器片を多量、獣骨片、炭化物を少量含む。

第6層 10Y R 5/6黒色土層。土器片を多量、炭化物、風化礫を少量含む。粘性有り。

第7層 10Y R 5/6黒色土層。土器片、炭化物、風化礫を少量含む。粘性有り。

第8層 10Y R 5/6黒褐色及び10Y R 5/6褐色土層。風化礫を少量含む。

② 遺物（第10図5、第12図37・49・50、第13図69、第14図83・84）

少量の土器片・土製円盤1点、石鏃1点・石棒1点・礫石器1点が出土している。5は大木7a式の口縁部資料である。口縁から頸部にかけて粘土紐の貼付により区画が施され、区画内

には半截竹筥による縦位・横位・山形の沈線が施文される。37は二本の沈線により文様を意匠するが全体のモチーフは不明である。49は晩期資料である。小破片のため全体のモチーフは不明である。口唇部に一条の沈線が巡る。50は土製円盤である。径1.3 cmと小形で、土器片の再利用である。69は挟りを有する石鍬である。鍬身は二等辺三角形に近い形を呈する。側縁は外側に弧を描き、先端部付近で一度縮まる。83は石棒である。両端は欠損し、全体の形状は不明である。84は礫石器で、偏平な楕円形礫の側縁を打ち欠いている。

(4) Ce51区 (写真7-1)

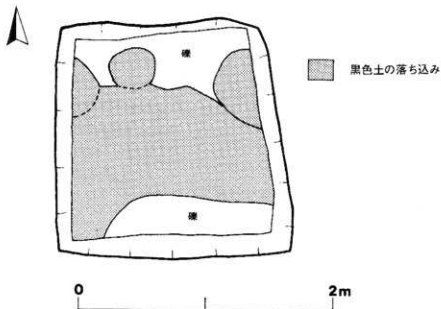
① 層序 (第9図⑦)

第1層 宅地造成の際の盛り土。

第2層 10Y R 5/2 黒褐色砂層。土器片、風化礫を少量含む。

② 遺構 (第8図、写真7-2)

地山面において黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みはピット状を呈するもの、不定形の溝状のものがある。一応遺構として把握し、実測後埋め戻した。性格については不明である。



第8図 Ce51区 遺構

③ 遺物 (第12図40・41・42・44・45・46・48、第13図74、第14図82・91・92)

少量の土器片、石鍬1点・磨製石斧1点・古銭2点が出土した。40は貼付文により楕円を意匠する土器で大木9式である。41は沈線により文様を意匠する。42は十腰内Ⅰ式に相当する資料で、平行線によって文様を意匠する。44・45・46は後期後葉の遺物で、貼瘤を有する。48は

大洞C₂に相当し、雲形文により文様を意匠する。74は石鏃である。鏃身のほぼ中央部付近で最大幅を測る。82は磨製石斧である。先端部が欠損する。91・92は寛永通宝である。

4. D50・D60地区 (写真8)

該区は西南向き緩斜面の南端、貝塚境にあたり、丘陵部下は、現在水田などに利用されている。

発掘区は、宅地及び畑地内に2区づつ設定し、西から順にD e 58、D f 59、D d 64、D e 65区とした。

各区の表土下は、ラミナ状に砂層が厚く堆積し、南方向にやや緩かに傾斜する。D f 59区における砂層の層厚は、ハンドオーガーによるボーリング調査によって、地表面から6mまで測るが下限は確認されていない。また、D d 64、D e 65区の砂層は、第9図⑨に示したように分層可能な堆積を示し、3層及び4層中より古銭が出土しているほかは、陸産巻貝などの自然遺物以外の資料は出土していない。

① 層序

※D e 58区 (第9図⑧)

第1層 宅地造成の際の盛り土。

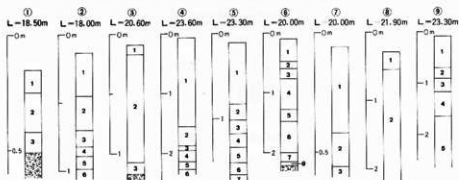
第2層 10Y R 5/6にふい黄橙色土層。ラミナ状に堆積する。陸産巻貝、微粒貝、炭化物を少量含む。

※D d 64区 (第9図⑨、写真8-2)

第1層 耕作土。

第2層 10Y R 5/6にふい黄褐色砂層。破砕貝、微粒貝を少量含む。

第3層 10Y R 5/6にふい黄褐色砂層。微粒貝、砂鉄を少量含む。



Bh44区 B e 42区 Ch41区 Bi 56区 Bi 57区 Ce50区 Ce51区 D e 58区 D d 64区

第9図 発掘区断面の柱状図

第4層 10YR 5/2 灰黄褐色砂層。陸産巻貝、破砕貝を少量、骨片、炭化物を微量含む。ラミナ状に堆積する。

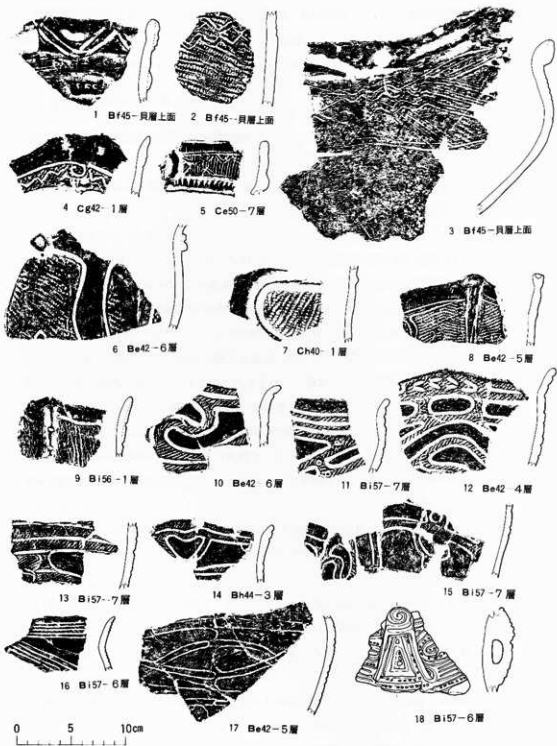
第5層 10YR 5/2 黄褐色砂層。陸産巻貝を少量含む。ラミナ状に堆積する。層厚は、不明。

② 遺物 (第14図93・94)

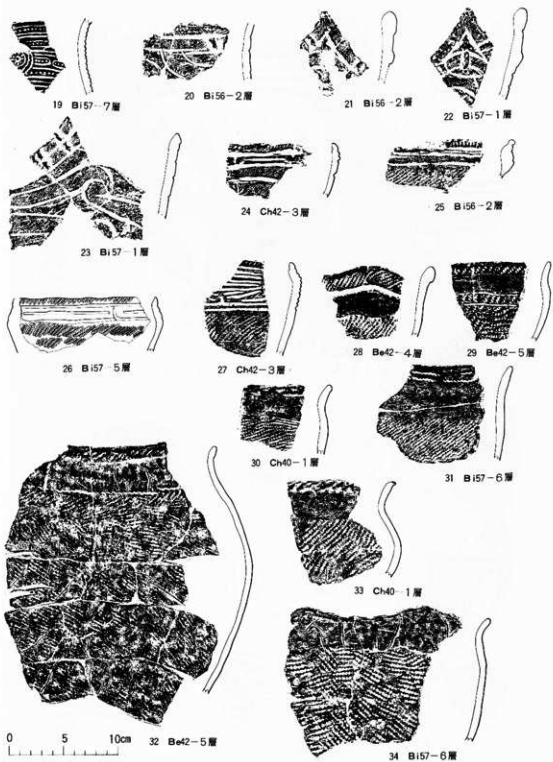
遺物は古銭2点のみである。D d 64区出土である。93は寛永通宝・94は仙台通宝である。94は腐食が著しい。

IV. ま と め

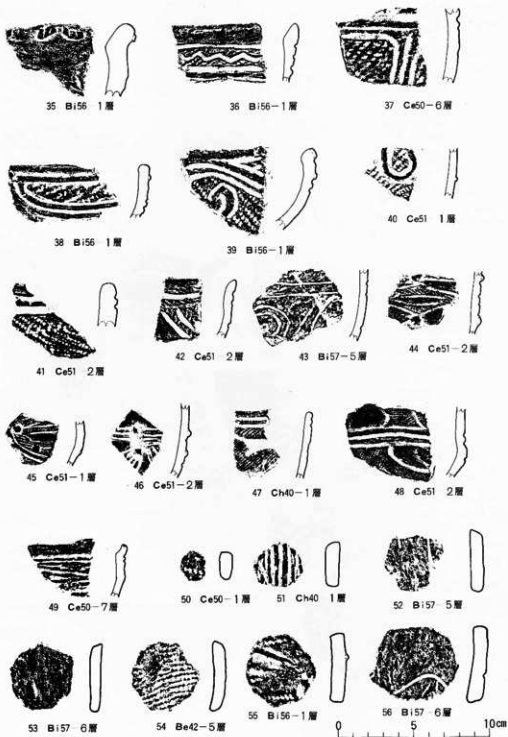
1. 貝層はB c 48・B f 45・B h 42区にて検出した。また、ボーリング調査及び表面観察により、B i 57区より北東方向へ15m程のカッティング面の地表下20~30cmの地点において、B c 48区より東側へ9mのブロック擁壁基部周辺において、B e 42区焼土の拡がり及び配石検出面より45cm程下面において、B e 42・B h 42区西側のカッティング面にて貝層を確認している。宅地化のため検証不可能の地点もあるが、貝層は丘陵の北側部分では東西60m程の長さで、西に向かって開析する沢に沿って堆積しているものと思われる。貝層の時期については、丘陵の北側部分では現在のところ、縄文時代前期末・中期末の貝層が確認されている。
2. D e 58・D f 59・D d 64・D e 65区において、ラミナ状に堆積する白色砂層を検出した。白色砂層にはほとんど遺物は含まれず、ボーリング調査により、D f 59区では6m以上堆積していることが判明している。表面的観察では、同様の白色砂層は丘陵の南側斜面全域に拡がっている。
3. 遺構は、B i 57区においてピット2基を、C e 51区においてピット状・溝状の黒色土の落ち込みを、B e 42区において焼土粒の拡がり及び配石を検出したが、完掘していないので詳細については不明である。
4. 遺物は、小型のコンテナ10箱程の土器片・土製品10点・石器30点・石製品1点・骨角器6点・古銭4点・小型コンテナ2箱程の自然遺物が出土した。
5. 土器は、縄文時代前期末・中期・後期・晩期、平安時代の遺物が出土したが、特に縄文時代後期中葉・後葉の資料が多く見られた。
6. 石器・石製品は、石鏃18点・石錐2点・円盤状石器1点・磨製石斧1点・石棒1点・礫石器2点・不定形石器5点・玉1点である。
7. 骨角器は、釣針2点・骨針2点・装身具1点・未製品1点である。



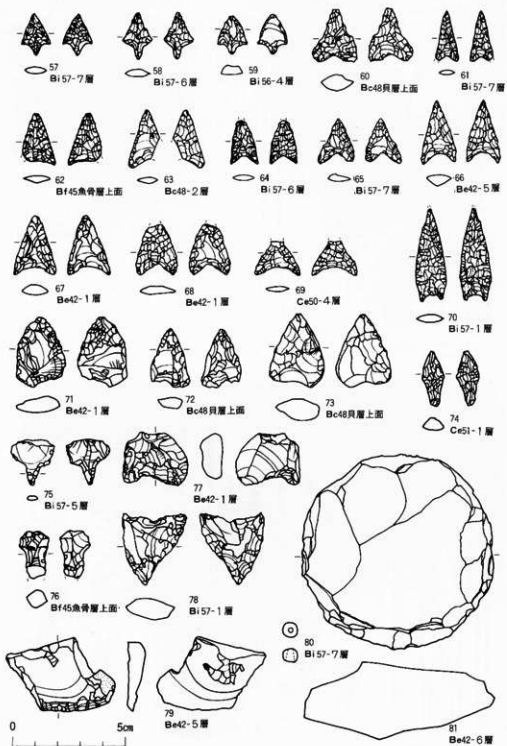
第10圖 出土遺物



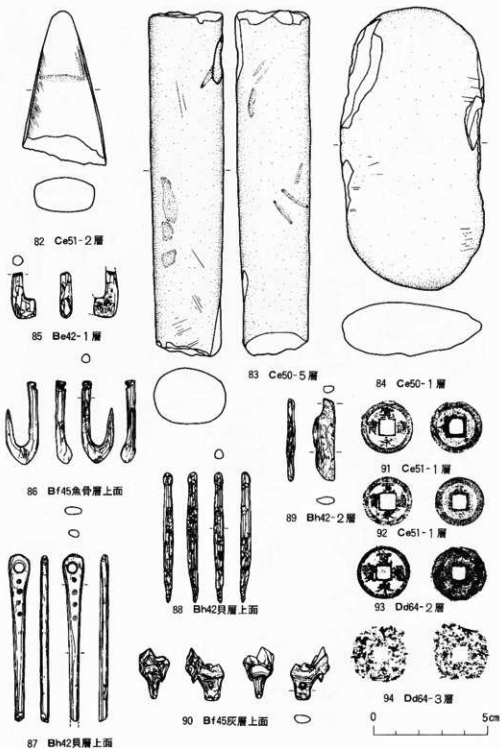
第11圖 出土遺物



第12圖 出土遺物



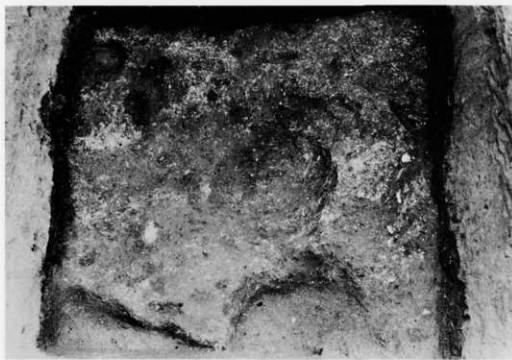
第13圖 出土遺物



第14圖 出土遺物



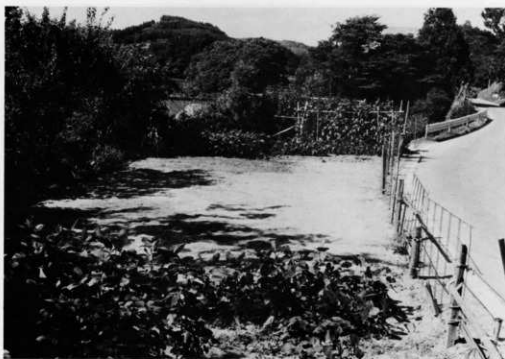
1 Bc48区 (ブロック塀部分は、59年度調査区)



2 Bc48区貝層検出状況



1 Bh44区、Bh46区発掘風景



2 Be42区、Bh42区(南より)

写真2 B40地区 (Be42区、Bh42区、Bh44区、Bh46区)



1 Bh42区具層検出状況



2 Bf45区精査

写真3 B40地区 (Bh42区、Bf45区)



1 Bf45区貝層検出状況



2 Bf45区拡幅部貝層検出状況

写真4 B40地区 (Bf45区)



1 Ch40区、Ch41区、Cg42区、Cf43区（北東より）



2 Ch41区基盤岩検出状況

写真 5 C40地区（Ch40区、Ch41区、Cg42区、Cf43区）



1 Bi56区、Bi57区（東より）

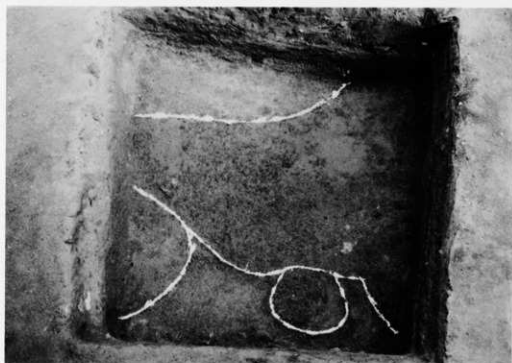


2 Bi57区ピット検出状況

写真6 B50地区（Bi56区、Bi57区）



1 Ce50区、Ce51区発掘風景



2 Ce51区黒色土の落ち込み検出状況

写真7 C50地区 (Ce50区、Ce51区)



1 Dd64区、Dc65区（北東より）



2 Dd64区砂層堆積状況

写真 8 D60地区（Dd64区、Dc65区）

岩手県陸前高田市
中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅱ
(陸前高田市埋蔵文化財報告書第10集)

発行日 1986年3月

編集・発行 陸前高田市教育委員会
岩手県陸前高田市高田町字館の沖110
TEL. (0192) 54-2111

印刷 高田活版所
岩手県陸前高田市高田町字大町5
TEL. (0192) 55-2694

